民　暴　弁　護　士　だ　よ　り

No.60

発行：公益財団法人　埼玉県暴力追放・薬物乱用防止センター　　令和６年１月

民暴弁護士の寄稿文

寄稿者

弁護士　高野哲好

【もっと光を】

１　２０２２年１０月に国内公開された「劇場版『鬼滅の刃』無限列車編」は、４０４億円という驚異的な興行収入を記録し、それまで最高だった「千と千尋の神隠し」の記録を塗り替え、社会現象にもなりました。皆さんの中にもご覧になった方も多いのではないでしょうか。物語は、人間を食べる恐ろしい鬼たちに対し、正義の少年剣士たちが、立ち向かっていくというもので、少年向けなのでしょうが、大人も胸が熱くなります。

　さて、この映画は、友情、勇気、思いやりの大切さなど、人生で大切なことをいろいろ気づかせてもらえますが、民事介入暴力（民暴）を考える上でも大変有益でした。今回は、そんなお話で。

２　この映画の「鬼」は、（鬼なので）超人的な力があり、無限の生命力があるようなのですが、なぜか、日光に弱く、それを浴びると、死んでしまいます。映画後半の真夜中の激闘は、日の出まで、勝負を長引かそうとする少年剣士と、それまでに決着をつけたい鬼をめぐって繰り広げられます。

　このように鬼は、暗闇でこそ、精彩を放つわけです。

　この点、暴力団員など反社会的勢力の者たちとよく似ていると思います。彼らも社会の闇の中にいてこそ精彩を放ちます。すなわち、法の明るい光が届かない、無法の闇の中こそ、彼らの領地なのです。そこでこそ、違法な行為を我が物顔で行うことができます。

　彼らに対抗するには、どうすればよいか。「鬼滅」の少年剣士が教えてくれます。闇の世界に強烈な法の光を浴びせることです。そうすれば、彼らはひとたまりもありません。

　例えば、反社の者たちが、違法な要求をしてきた場合、闇社会のルール（慣行）に従うことなく、警察や弁護士らに相談し、毅然と法律に基づき対処する旨通告すれば、それ以上、反社の者たちが、違法な要求を続けることは困難になります。警察や弁護士が介入し、法に基づく処理がなされた場合、彼らの無法な言い分が通るわけがないからです。

　別の闇の勢力に頼って、当面の問題に蓋をしようなどとすることは、最大の愚策です。

３　反社の攻撃がいったん収まったとしても、彼らと絶縁したり、彼らから受けた損害について賠償請求してもらわなければ、本当に決着がついたとは言えません。

　そのためには、「武器」が必要です。「鬼滅」の少年剣士の武器は「刃」でした。現代

の大人の武器は、「証拠」です。

闇の世界に強烈な法の光を浴びせる、と先ほどお話ししましたが、その法の光を照射させるには、証拠の裏付けが欠かせません。

反社の者たちが違法な行為をしている事実についての証拠があれば、警察も弁護士も動きやすくなります。

例えば、反社の者たちが恐喝・脅迫している際の音声を録音することなどは、有益です。反社の者たちも、証拠を集められることは怖いことなので、無法行為をしづらくなります。この原理を利用して、反社の者たちと話をするときは、「大事なお話なので、録音いたします」と通告することにより、無法な言動を抑止することが見込まれます。

また、反社の者たちの氏名・所属を確認することも大切です。後々、彼らの責任を追及する際、違法行為をしているのが誰なのかを明らかにしておくことは大切です。

なお、法による解決を求める場合、反社の者らに有利な証拠は、彼らの武器になります。彼らに「武器」を与えないように、反社の者たちの示す書面にはサインをしないことを基本とした方がよいでしょう。書面のタイトルが、契約書、念書、覚書など何であっても、サインをした後に、その効力、信用性を覆すのは、一般に簡単なことではありません。

4　闇の勢力は、光を浴びせれば、恐れるに足りません。何かあったら、「そうだ、弁護士に、相談だ」と、頭の片隅に入れていただければ、幸いです。

寄稿者

〒330-0063

さいたま市浦和区高砂３－７－６

武笠ビル 15 階

たかの県庁前法律事務所　☎048-826-7223

埼玉弁護士会民事介入暴力対策委員会

弁護士　高野　哲好

この原稿は、公益財団法人埼玉県暴力追放・薬物乱用防止センターが賛助会員に配信しているメールマガジン「埼玉県暴追センター通信№178」から転記したものです。